

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 5	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
<b>題名 (原題/訳)</b> Alcohol intake and colorectal cancer: a comparison of approaches for including repeated measures of alcohol consumption. 飲酒と大腸癌：飲酒状況評価方法や評価回数による比較	
<b>執筆者</b> Thygesen LC, Wu K, Grønbaek M, Fuchs CS, Willett WC, Giovannucci E.	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b> Epidemiology. 2008 Mar;19(2):258-64.	
<b>キーワード</b> 大腸癌・中等度飲酒・大量飲酒・飲酒頻度	
<b>要 旨</b>  <b>背景：</b> 飲酒と大腸癌との関連については多くの研究が示しているところである。しかし、ほとんどの研究は飲酒状況を1度しか評価しておらず、そのために長期的な飲酒状況を性格に把握できていない可能性がある。	
<b>方法：</b> 米国で47,432名の男性を追跡している医療保健職追跡研究において、飲酒状況の繰り返し把握を含む複数の評価方法を比較した。飲酒状況についての質問を含む質問票による調査を1986年、1990年、1994年、1998年に行った。評価指標は1986～2002年の追跡期間内に発症した大腸癌とした。	
<b>結果：</b> 追跡期間中に868例の大腸癌新規発症を観察した。初回調査時、追跡調査時、および累積評価による飲酒量は、大腸癌罹患と関連しており、その関連の強さは飲酒量の把握方法によって大きな違いはみられなかった。1日30g以上のアルコール摂取で中等度に大腸癌罹患は増加し、初回調査時のアルコール摂取量が10g増加することによる大腸癌罹患のハザード比は1.07(95%信頼区間：1.02-1.11)であり、初回調査以降の飲酒量や累積飲酒量を用いた解析でも同様の結果であった。複数回の調査で常に中等度あるいは多量飲酒があると大腸癌の危険度は増加し、中等度以上の飲酒の開始時期が遅ければ大腸癌発症の危険度は若干低下していた。1日15グラム以上のアルコールを摂取する男性では、飲酒頻度と大腸癌罹患危険度とも関連がみられた。	
<b>結論：</b> 飲酒は大腸癌と正の関連を示し、その関連には調査方法によってほとんど差がなく、個人内の飲酒習慣は調査機会を増やしてもほとんど変わらないと考えられた。	